11 第二九回県母親大会　八〇〇名を越える母親の参加で新潟小学校で開催
中学生問題の分科会は、廊下まではみだす参加者でいっぱい。

19 県警　今年上半期（一－六月）の校内暴力の実態調査を明らかにする。
昨年をはるかに上回る状況

27 県高教組　第三回高校教育審議会をひらく

10月

4 長岡市東北中学校　校内暴力で三年生の男子三名が現行犯逮捕

8 新潟市で、中学三年生、不愉快なあだ名をつけた級友宅に放火し逮捕（11日、先月全焼した自分の通う中学校にも放火したことが明らかになる）

11 県教委　来春から県立高校農業科を普通科に転換することを、県議会総務文教委員会に示す。
水原高、安塚高、吉川高の三、校四学級を対象

県教育長　東北中暴力事件の対応は、やむ得ぬ措置と答える。
しかし、校内暴力事件における警察力要請の四基準との関係で再調査を約束

「ほえろ！チビ」

溝井英雄　作
内山　格　絵
学校図書　九八〇円

高橋　武昌

星児「お父さん、ぼく、すごくこわかった。長岡ってとこ、大変だったんだねえ。」

父　「うん、星ちゃん、湯沢に帰るとき、いつもすっと通ってしまう長岡は、三十八年前の空襲をうけて、多くの人たちがなくなったんだよね。この本の印象深い所、他は。」

星児「はじめの方、健とか良三たち信濃川で遊んでたでしょう。ちょうどぼくたちと同じ五年生みたい。良三がおぼれたのがあとでわかって先生におこられるのがつらかった。いやな先生だった。」

父　「そうか、何といっても、お父さんは、平潟神社に空襲でなくなった人たちが山のようだった…というところ涙がでたなあ。広島や長崎の原爆をうけたところだけでなく日本のいたるところが大変だったんだねえ。」

星児「そうそう、ぼくはね、さいごのところでね、空襲のおそろしさでしゃべれなくなったのり子ちゃんが、みんなにあたたかくされ、ついに笑うでしょう。涙がでたよ。でもね、このあいだゲンの映画のとき、原爆がおちて、目玉がとびだしたり、ゆうれいみたいになったのをみて、ぼくの近くの子が笑っていたのは、いやだったなあ。」

父　「そうだね、君たちのような子どもの中にも、心から悲しいことがわからない子もいるんだね。なにか、さみしいね。お父さんたちも、いっぱい昔のはなしをしなくちゃ。」

星児「お父さんは、戦争は最大のこの世の非行だというけどさ、非行というのは、だれかが、非行をするというんだから、だれかがするんでしょう。だれがするの。」

父　「うん、むずかしい話だ、星ちゃんが、毎日勉強する意味は、そういうことを学んでいくためにもやるのかもしれない。」

二男の星児と食後はなしをしていました。溝井さんのかかれたこの本は、長岡空襲のとき生きぬいた少年たちが、主人公です。今の殿町あたりに住んでいた元気のいい少年たちは、昭和二十年八月一日の夜、約二千トン以上の焼夷弾をうけます。千手町では、三・三平方メートルに平均8本もの焼夷弾がおとされるというおそるべきじゅうたん爆撃にあうのです。

このお話は単に戦争をドキュメント風に教えてくれるというものではないのです。八月の長岡空襲の前後を生きる人間たちの状況・社会状況をドラマチックにしかも形象深く読ませてくれます。聖戦を信じて疑わない健の父、そして対称的な元新聞記者で非国民と偏見の目でみられている岡本さんや人道主義者の捕虜でもあるオルト医師など登場します。空襲でにけまどい、生死をさまようとき、これらの人間たちが織りなす行為が、私たち読みてにひしと伝わってきます。そして、どん底の中であたたかくかかわりあいながらはげまして生きようと努力するこの本の持つ向日性に、子ども達は、安心するのです。人間が炭のようになり物質化した、おそろしい地獄絵図が展開するけれど、この本のドラマ性即ち人間を信じて生きようと努力している暖かさは、溝井さんのしたたかな文筆によるものでしょう。

健少年の妹ののり子が空襲のショックで自閉症状になってしまいます。岡本さんは、こののり子のために大すきな犬をくれます。この犬とたわむれるのり子ちゃんはついに、笑いしゃべれるようになるところは、圧

巻だと思います。作者の子どもの変容を人間のかかわりの中でとらえているところは教師としても学ばされます。

作者の視線がやわらかい子どもに注がれていることを感じます。

この本の対象は高学年でしょう。ルビも充分ふってありますから、中学年でも読めるかもしれません。この本を高学年の子に教室で家庭で読みきかせてあげたらいかがでしょう。私の六年生のクラスにも長岡からお母さんが来た子二人、親るいのある子三人います。決してよそのはなしではないのです。子ども達に空襲のこわさや状況を伝えるということもあるでしょうけれど、やはりそれより、ひまわりのように逞しく生きぬく子たちが、お互いの自立と幼ない仲間への自主へのはげまし、まわりの大人たちのかかわりの中で変容していくすばらしさ、楽しさを味わってほしいと思うのです。

新潟県の地域にしっかりと根をはった児童文学のひとつにふれた思いです。

まず一人でも多くの教師・父母が読んでみましょう。今までとはちがった話題が、教室で家庭でふえるはずです。

（新潟市・丸山小学校）

新潟県医師会編

「明るく　逞しい　成長のために」

片岡　弘

今日、子どもたちの心と体の発達のゆがみはいよいよ深刻さを増して進行してきている。私が担任している小学校二年生に例をとれば、たとえば、積極的に身体を動かして物事に働きかけることを厭うとか、感情や感性が衰弱し、話しことばと生活語彙がたいへん貧しくなっているとか、人間的な価値意識の獲得が困難になっているとか……等々の姿でそのことが現われている。低学力、非行、家庭内暴力、校内暴力という今日的な問題の奥底にも、そうした言わば「人間的なものの発達」の危機が潜んでいるとも言えるだろう。

端的に言ってそのように考えていた折、新潟県医師会編「明るく　逞しい　成長のために」という冊子を読む機会を得た。

二七〇ページから成るこの冊子は勿論学会の報告書などではない。序文で、県医師会長の相沢三雄氏は、「本書は、子どものヒューマンバイオロジー（人間生態学、私どもはこれをあえて人間形成学と考えます）のひとつとして、次代を担うべき子ども達の明るくたくましい成長を希いつつ、世の大人たちに問いかけるべく作られたものです」と書いている。

正直言って私は、今まで、県の医師会がこうした事業（これまでも、『お母さんのための健康教育』『健やかな老化のために』『心と体の成長のために』という冊子を、『健康教育シリーズ』として刊行しているという）を行なっているなどとは夢にだに思わなかった。それだけに、引用した相沢会長の言葉には少なからぬ感動を覚えた。というのは、執筆者たち（研究者や開業医）がそれぞれの医学の専門分野について書きながら、しかし全体としては『人間形成学』という極めて今日的な課題に位置づけて、この冊子をまとめようと努力されているからである。そこには、今日の子どもをめぐる問題状況を真面目に深刻に受けとめ、医師として何をすべきかを模索しようとする医師集団の良心と意欲がにじみ出ていると思う。

第一章では、「子どもの成長と発育」と題して、新大小児科の渡辺渡氏が、胎児期から青年期までの、身体発育と精神発達を概観している。限られたスペースのせいであろう、やや教科書風になってしまったきらいがないでもない。しかし、子どもが「人間として」成長していくということはどういうことかという視点を一貫させており、特に感情や意志を統御する前頭葉の機能の大切さを述べ、遊びや労働経験が前頭葉の発達をうながすことにふれながら「早期からの孤高のエリート教育には、それなりのリスクを覚悟してのぞまなければならない」と警告している点など注目に値しよう。

以下、Ⅱ新生児期における母乳哺育（関塚正昭氏＝新発田市）、Ⅲ躾と体力づくりのための栄養（吉田椮氏＝新潟薬科大）、Ⅳ一歳六か月児及び三歳児健診の意味するもの（相場益夫氏＝燕市）、Ⅴ子どもへの期待と子どもの注文（相場益夫氏）、Ⅵ小児と動脈硬化症（丹田稔氏＝村上市）、Ⅶ小児の疾病の予防・診断・治療（笹川力氏＝新潟市民病院）、Ⅷ子どもたちをタバコの煙から守るために（貝沼知男氏＝新潟労災病院）Ⅸ健康について生徒並びに父兄の関心度についての調査（河内実氏＝南魚沼郡）、Ⅹ子どもと家庭（三沢博人氏＝信楽園）、Ⅺ体力づくり・その2（鈴木啓三氏＝北魚沼郡）と、いわば医師たちの現場からの、世の親たちへの提言が開陳されている。

関塚氏は、アメリカに追随した戦後日本の産科学の問題、粉乳企業の誇大な宣伝が母親に母乳哺育への自信を失わせた点などを指摘しながら、「なぜ今、再び母乳哺育なのか」を丁寧に解説している。

「肥満児は成人病の予備軍である」「子どもに成人型疾病が増えている」「動脈硬化の予防は小児期から」（吉田・丹田・笹川各氏）「子どもに与えるタバコの害」（貝沼氏）の各編